

琳派展24

抱一に捧ぐ

—花ひらく〈うげあん雨華庵〉の絵師たち—

会期 2024年12月7日(土)～2025年2月2日(日) ※一部展示替えあり

「雨華庵」ゆかりの抱一以降の絵師たちに注目！江戸後期から近代にかけての

江戸琳派の広がり、いわば“アフター抱一”の作品を広く紹介する試みである。

酒井抱一（1761～1828）は、姫路酒井家の次男に生まれ江戸の大名屋敷で育った。数え年33歳頃から屋敷を出て転居を繰り返す、37歳で出家した後、50歳を目前にした文化6年（1809）師走、身請けした吉原の遊女とともに移り住んだのが下谷根岸の百姓家であった。

この庵は8年後の文化14年（1817）に「雨華庵」の額を掲げ、以降「雨華庵」と称される。仏間に画室を併設した「雨華庵」は、後に養子の鶯蒲（雨華庵2世 1808～41）、鶯一（3世 1827～62）、道一（4世 1845～1913）、抱祝（5世 1878～1956）らが継承する。

「雨華庵」は抱一が多数の晩年作を描いた作画の場であり、弟子たちを指導する画塾でもあった。また出家した抱一の、画僧の住まいとしての役割も兼ねていた。その没後は抱一を慕う門下の絵師たちの拠りどころとして長く認識されていく場所となる。

本展は「雨華庵」ゆかりの絵師たちを多角的に蒐集した「うげあんコレクション」の協力を得て開催される。「うげあんコレクション」の江戸琳派作品には稀少な作例も多く、その細やかな蒐集はこれまでの江戸琳派観をより豊かに広げるものである。

これに細見コレクションから、「雨華庵」に纏わる作品や一門の交流を示す作例などを加え展覧する。細見コレクションにおいて琳派作品を蒐集した二代細見實は、知られざる絵師までもカバーすることを心掛け、それが琳派の深い理解に繋がると確信していた。

今回まさに両コレクションならではのコラボレーション展示が実現する。抱一に憧れ、慕った絵師たち一戦後に至るまで百数十年に及ぶ江戸琳派の軌跡とその魅力を、数々の作品の競演によりご堪能いただきたい。

雨華庵(うげあん) とは

酒井抱一（1761～1828）が50歳頃から没年まで住んだ、画室を備えた庵。もと下谷根岸の百姓家で、今の東京都台東区根岸5丁目付近にあった。この庵を「雨華庵」と称したのは転居から8年後の文化14年（1817）以降のこと。四季折々の草花が庭を彩る同所から主な抱一作品が生まれ出されており、抱一自身も「雨華庵」と称した。

雨華庵は抱一没後、養子鶯蒲らによって守られ、抱一を慕う江戸琳派の絵師たちの拠りどころとなった。慶応元年（1865）に焼失、4世道一が再建し、近代には江戸琳派に連なる画家はもとより抱一作品の愛好者の聖地ともなった。現在は台東区の建てた看板のみがその形跡を伝えている。

— 展示構成 —

抱一作品はここから生まれた！

第1章 酒井抱一の画所〈雨華庵〉

抱一が50歳を迎える前年の歳暮、文化6年（1809）12月から没年（文政11年〈1828〉11月）まで約18年間を過ごした雨華庵（庵を「雨華庵」と称するのは文化14年〈1817〉以降）。吉原から身請けした遊女を伴い転居したこの庵は酒井家の次男としてはまことに慎ましい住まいだったが、多くの作品がここで描かれた。

また出家した抱一は同所で仏事を行い仏画も手掛けている。抱一作品誕生の場、雨華庵のはじまりを彩る「紅梅図」や「青面金剛図」は、抱一の晩年の人物像をリアルに伝えて極めて貴重である。

左) 酒井抱一 画 小鸞 賛 《紅梅図》 文化7年(1810) 細見美術館蔵

右) 酒井抱一 《青面金剛図》 文化14年(1817) 細見美術館蔵



ポスト抱一、百花繚乱

おうほ

第2章 継承される雨華庵—2世鶯蒲や愛弟子たち—

雨華庵では多くの弟子たちが抱一の指導を受け、次世代の江戸琳派絵師として育った。抱一の高弟としては鈴木其一や池田孤邨が著名だが、雨華庵そのものを継いだのは、市ヶ谷浄栄寺から養子に迎えた鶯蒲（1808～41）である。他にも知られざる絵師は多く、本章では彼らを紹介するとともに、特に山本素堂（生没年不詳）やその長男・光一（1843?～1905?）に注目する。



左) 山本素堂 《朱楓図屏風》 江戸後期

右) 酒井鶯蒲 《筑波山之図》 江戸後期

維新後の江戸琳派はお任せ！

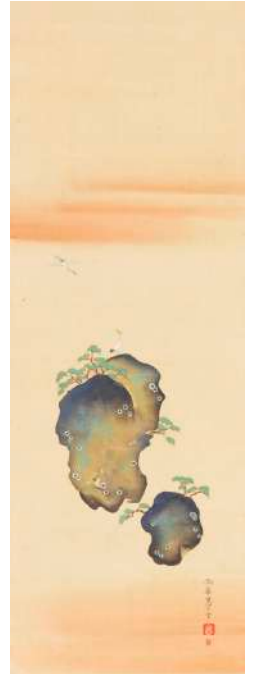
どういつ

第3章 雨華庵再興—4世道一の活躍—

2世鶯蒲の養子として雨華庵3世を継承した鶯一(おういつ)
(1827～1862)は、作品も記録も稀少であった。その没後、慶
応元年(1865)に雨華庵は不審火で焼失するが、翌年素堂の次
男、道一(1845～1913)が鶯一の娘と結婚し雨華庵4世として再
興した。明治期の新たな機運の中で道一の活躍は目覚ましく、抱
一や其一の画風を基盤とした明快な作風は新時代における江戸琳
派の旗手として本展で広く取り上げるところである。

左) 酒井道一 《藤に牡丹図》 明治期

右) 酒井道一 《蓬萊図》 明治期



昭和まで抱一画風をキープ

ほうしゆく

第4章 江戸琳派の末裔—5世抱祝による顕彰—

大正期から戦後に至るまで、雨華庵5世を担ったのは酒井唯一(ゆいいつ)こと抱祝
(1878～1956)である。父道一に倣い、代々受け継がれてきた雨華庵の気概を以て江戸
琳派様式の普及に努め、作例も少なくない。これらの抱祝作品の数々は、昭和中期まで江
戸琳派の需要が高かったことを顕著に示すとともに、その終焉をも示唆している。

酒井抱祝 《朝桜図》 大正期～昭和前期



酒井抱祝 《十二月花鳥図屏風》 大正期～昭和前期

【展示期間 右隻：1月7日～2月2日 左隻：12月7日～12月25日】

小画面に込められた思い

第5章 抱一風を伝える一画帖・画卷の魅力

抱一を筆頭に、雨華庵に連なる主な絵師のもとにはそれぞれ多くの弟子が集まり、中には商家の主人や吉原の遊女などが手ほどきを受けることもあった。画題や画風の学習に鑑賞用も兼ねて弟子たちに示されたのが、絵手本としての画帖や画卷である。これらは月次の花鳥や景物、吉祥などの画題を描き連ね、小画面ながら見どころも多く、江戸琳派の魅力が凝縮されている。



鈴木其一 《月次花鳥画帖》より 江戸後期 細見美術館蔵

【頁替あり】

— 展覧会概要 —

*会期・営業日時等を変更する場合があります。最新情報はWEBサイトをご覧ください。

展覧会名称	琳派展24「抱一に捧ぐー花ひらく〈雨華庵〉の絵師たちー」
会期	2024年12月7日(土)～2025年2月2日(日) ※一部展示替えあり
開館時間	午前10時～午後5時
休館日	毎週月曜日(祝日の場合、翌火曜日)、年末年始(12月26日～1月6日)
入館料	一般 1,800円 学生 1,300円
主催	細見美術館 京都新聞
特別協力	有限会社うげやん
会場	細見美術館 京都市左京区岡崎最勝寺町6-3 http://www.emuseum.or.jp
本展連絡先	細見美術館 TEL: 075-752-5555(代) FAX: 075-752-5955(代) 広報担当 大塚 kouhou@emuseum.or.jp

《事前予約不要》混雑時は入場をお待ちいただく場合があります。

展覧会資料(画像)・取材をご希望の方は、
[ホームページ](#)・[リリースページ](#)もしくはQRコード
「[資料・ご取材申込フォーム](#)」からお申込みください。



←資料・ご取材申込フォーム

